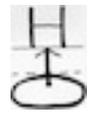


さくら通信



Hoju
Group
宝樹会

No.15

2019

宝樹会によるウィーン発の浄土真宗会報誌

道を求めるころ (12)

道を求めるころ (その2) 2

岡本英夫

求道の出発 (前回の続き)

童子は文殊菩薩に申し上げます。

「円満この上なき慈悲、清浄なる智慧の日よ、わが煩惱の海を消し尽くしてください。智慧の願を満たし、功德の蔵を積み、一切の者を救おうとする仏よ、願わくは我れを救いたまえ」

この童子の言葉を聞いて、文殊菩薩は童子に告げます。

「いいぞ、童子よ。お前は今、起こしがたい真実を求めようとする心を起こしている。今より、善知識を求め、善知識に親近（しんごん）し、菩薩の行いを問ひ、菩薩の道を探めよ。一心に恭敬（くぎょう）して厭足（えんそく）なく、菩薩の行を問え。どのように菩薩の道を探めばいいのか。どのように菩薩の道を探めていけばいいのか。そして、どのようにして普賢（ふげん）の行を身に頂けばいいのか。」

恵みと新たな決意

こうして、文殊菩薩の教えと勧めによって、善知識を訪ねて菩薩の行を問う善財童子の求道の歩みが始まるのです。

道を探め始める善財童子のその出発の姿には、前回お話した雪山童子の出発と共通しているものがあります。その大きな一つは、それまでの歩みは恵まれていたものであったが、さらにその次の教えは、自ら立ち上がった



木のもとのお話(15)

他力本願と自力

「他力」は他の力にまかせて何もしないということではありません。

また、日常生活の決断などを他の力に委ねるということでもありません。

「他力」はお釈迦様のお教えの真実の力です。

ですから「他力本願」はお釈迦様のお教えを聞いたり、勉強したり、心に留めることによって

次第に明らかになってくる阿弥陀仏の本願のことです。

て求め、そこに「出発」がなされるということです。

雪山童子は、雪山の中で坐しているところへ、何者かが真実を説く「前の半偈」を説き、それが雪山童子の耳に入った。前の半偈は因縁恵まれて得ることができたわけです。しかし童子はそれを聞いてみて、これには「後の半偈」があるに違いないと思い、自ら立ち上がってそれを求めていきます。

今善財童子も、これまでは仏法の因縁厚いところに住み、どことなく仏法の世界に触れてきた。しかし文殊菩薩から教えを聞き、自己の闇を強く知らされることによって、教えを求めていこうと立ち上がったのです。

人は誰であっても、どのような年齢であっても、これまでの歩みは因縁恵まれて歩ませて頂いたものだと感謝して受けとめ、そしてこれからの歩みは、自ら立ち上がって、さらに一步奥へ未踏の天地を切り拓いていくのだと、求道の決意を強く起こして歩むことになるのです。

基本の問いに生きる

第一の善知識文殊菩薩の勧めにより、善財童子は第二の善知識である功德雲比丘（くどくうんびく）を訪ねます。山中を一週間探してやっと訪ね当たる。そして次のように教えを請うのです。

「私は既に菩提心を起こしました。しかし、どのように学び、どのように歩めばいいのか、それが分かりません。どうか教えて頂きたい。」

求めるものは真実。真実だけが人を救う。その真実に出遇いたい。しかし、そのために何をどのように学び、どのように歩んでいけばいいのか。童子はこれを尋ねます。これから出遇うすべての善知識に対して、このように問うていくのです。常に求道の原点に返り、「零（ぜろ）」の自己を確認し、そこから出発しようとする。そして真実からのほたらきかけ、真実の教えを頂いてゆくのです。

「我（が）」に根ざした自己の思いを主張せず、何も分からない者として、ただ真実を頂いて生きる。この透明な在り方が善財童子の生きる姿勢なのです。両手を空（から）にして真実に真向きになる童子の謙虚にして熱い姿が、ここにはあります。

功德雲比丘から童子は多くのことを教わります。その中心は、この世界の全てのものは如来の光に照らされているということ。従って、すべてのものの善や悪などのそれぞれの在り方それ自体が一番の問題ではなく、どのようなものであっても、如来の真実の光に照らされている一つ一つであることを確認することが一番大事なのだと。さらに、自分が今分かっていない深い世界はこういうことだと、それを説き表わします。

（続く）

